

節酒しながらもデイケアに通所し治療中断を防いでいる症例の報告

○菊地俊一 佐々木知之
作業療法士 看護師
医療法人耕仁会 札幌太田病院

1. はじめに

枉らは、節酒を治療目標に加えることの意義として、治療関係を維持し生命の危機に瀕するリスクを低減し、断酒への段階的な介入方法であると述べている。当デイケア(以下DC)では近年、酒臭のある通所者も帰宅させず、個別対応を通して治療中断を防ぐ取り組みを行なっている。

2. 症例紹介

A氏、男性、40歳代、主病名アルコール依存症。14歳で初飲酒、20歳代で結婚し子どもをもうける。X年6月当院初診、断酒目的でDC通所。飲酒は続き幻聴、希死念慮出現や家族への暴力、脅迫でX+1年に2回当院入院。同年5月退院後、家族と別居、病院近隣に引越する。しかし、子どもからの面会拒否を契機に再飲酒しDC通所が途絶えたため、DCでは重点的に個別支援を開始した。

3. 治療経過

DCでは、主治医指示にて自宅訪問、服薬管理や両親との連携も行ない治療中断の防止に努めた。本人の希望に沿って抗酒剤や断酒補助薬を服用しないという対応を主治医確認のもと行うほか、担当スタッフは個別に面談をして辛い気持ちを表出する機会を増やした。A氏は飲酒している自分はDCに来てはいけないと発言し、プログラム参加に消極的であった。また、A氏は飲酒したことを謝罪するが、依存症の症状としての理解を促し、A氏を応援しているメッセージを伝えていった。また、本人の求める生活像を確認することで断酒のモチベーションが低下しない様に関わりをもった。このようなDCでの重点的な対応を通して、当初、毎朝飲酒していたが徐々に朝酒の回数が減り、7週間には週に1~2回は飲酒せず通所出来るようになった。

4. 考察

依存症治療で当事者の飲酒に対する正直さや治療意欲を失わせない治療者側の関わりが大切である。毎日、短時間でもねぎらいの言葉かけや面談を繰り返すことで、辛い気持ちや後悔など表現し易い環境づくりをした。また、飲酒して通所することを前提として対応したことも、A氏が飲酒したことを正直に話すことができた要因と考える。抗酒剤は本人の意思を尊重し、服薬しないことを保証した為、DCの通所継続に寄与することができたと考える。

課題としては、飲酒してDCに通所することで断酒している通所者と自分を比較して、自己評価の低下を招く。また、断酒して通所している方への配慮が必要となる。

引用文献: 枉岳文, 武藤岳夫, 遠藤光一, 吉森智香子: アルコール使用障害の治療目標. 精神神経学雑誌, 119; 245-250, 2017